

# 新元号「令和」への思い

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄

4月1日の新元号公表をテレビで目にした時、多くの方々がそうであったように、予想外で少々驚きました。菅長官の説明を聞いた後も、『万葉集』梅花32篇の『序文』から取ったということだけは了解しましたが、私自身、その部分を読んだ記憶がなく、自らの不明を恥じたりもしました。

序文にある「初春令月」ですが、令月という言葉は日本でも中国でも現代語としては耳にしたことがありません。私の頭に浮かんだのは「令」の字が、多くの場合美称として使われることです。「令息」、「令嬢」などがその一例です。中国でも「令愛」（相手の娘）、「令夫人」（相手の妻）などが時として使われます。また土産物のケースや包装紙に「時令食品」（季節の食べ物）と書いてあるのをよく見かけます。この場合「時令」とは「節日」、日本でいう節句のことです。

では古典世界ではどうかと調べてみたところ、ぎらい れいげつきちじつ『儀礼』に「令月吉日」という言葉がありました。きつげつれいしん「吉月令辰」というものもあります。「令月」といっても「吉月」といっても意味は同じです。つまり、「令」も「吉」も同じく「めでたい」という意味です。『儀礼』にはこの日に元服の儀を執り行うことが書かれています。

さて、この度の新元号は旧来の漢籍からではなく国書から選ばれたと、安倍総理が誇らしげに宣言する一方で、マスメディアの一部あるいはネット上では、そのもとになるちょうこう きでんふ張衡（78～139）の『帰田賦』の存在が取りあげられています。中国でも同様な現象が起きているようです。

『帰田賦』は『文選』にも採録されているので当時の日本の貴族・文人ならば当然丸暗記するほど読み込んでいるはずです。大伴旅人の記したと言われる『序文』に、似たような文句が出てきたとしても

何ら不思議ではありません。念のため両者を比較してみましょう。

于時，初春令月，氣淑風和…「序文」…『万葉集』  
於時，仲春令月，時和氣清…「帰田賦」…『文選』  
非常によく似た文章で、「令和」の2文字も両者に共通しています。影響関係があることは一目瞭然でしょう。もちろん、『万葉集』が『文選』の影響を受けているということです。だからといって盗作ということではありません。古の名文に似せた文章が書けるということは、それだけ学があるということの証明でもあります。

違う所と云えば、前者が梅園を題材としているのに対して後者は田園を題材としていることです。全文を通して読んでみても、後者に梅の花は出てきません。この頃はまだ中国にも梅花を愛でる習慣は無かったようです。梅は中国最古の詩集『詩経』にも出てきますが、梅が珍重されたのは、その実に薬効があるからでした。

日本人が梅花を愛でるようになったのも、そう古いことではありません。この「序文」の書かれたころがそのハシリであったと言われています。だとすれば8世紀半ばということになります。では中国ではどうかというと、梅花を読んだ詩が盛んになったのは六朝時代、西暦で言えば6世紀ごろのことです。漢代から民間に伝わる歌謡のスタイルにがふ「楽府」というのがありますが、これは六朝時代には文人の間でも流行していました。このスタイルには楽曲にがふだい応じて題名がついていて、これを「楽府題」といいます。この楽府題の一つにばいからく「梅花落」というのがあり、当時の中国ではこのスタイルに合わせて多くの文人たちが梅花の詩を作っていたようです。但し同じ「梅花落」と言っても、これはあくまで楽曲の名称がもとになっているので、すべてが梅を題材にしている

とは限りません。この楽府題は日本にも入って来ていて、時代は少し下りますが、有名なところでは嵯峨天皇（786～842）が「梅花落」と題する漢詩を残しています。これは題名通り、梅を歌ったものです。

観梅の文化が中国から遣唐使によって先に九州にもたらされ、都に広まったのは嵯峨天皇より少し前、奈良時代のことです。したがって、大伴旅人が敢えて九州の大宰府で梅花の宴を催したということは、それなりの先進性があったということになります。

さて、『序』の末尾の方に次のような字句が見えます。

詩紀落梅之篇，古今夫何異矣（詩に落梅の篇をらくばい紀しるす。古今夫れ何ぞ異ならんや）

ここで言う「詩」とは、中国の古い詩のことです。「落梅の篇」とは「梅花落」のことを言っているものと思われまふ。昔の日本では、「歌」といえば和歌、「詩」といえば専ら漢詩を指していました。「古今」の「古」とは昔の中国、「今」とは今の日本（当時）を指しています。このことからわかることは、それよりずっと前から中国には梅を詠んだ詩がたくさんあり、それ以前の日本には、それがなかったということです。しかし梅花を愛でたいという気持ちは昔の中国も今の日本も変わらないと言っているわけです。この言葉の裏には、より進んだ中国文化に早く追いつきたいと願う旅人の気持ちが秘められているようにも思われます。

ここで今一つ気づいたことは、『帰田賦』では「仲春令月」となっているのに対して「序」では「初春令月」となっていることです。「仲春」とは二月、「初春」とは一月のことです。旅人が宴を開いたのが天平2年正月13日ですから正に「初春」に当たります。これに「令月」を当てたのは、古代中国の表現習慣にはそぐわないような気も致します。しかしこれにどういう意図が働いたのかはよくわかりません。「初春令月」は旅人の造語なのか、あるいは「令月」はもともと二月に限らず幅広く使われていた言葉なのかもしれません。

ところで日本人の季節に対する感受性は独特のもので、この感性が日本固有の文化を築き上げたという話をよく耳にします。私も常々そのように思っていました。したがって、これに異議を唱える気は毛頭ありません。しかし、その感性を歌に詠み込み、文学といえる領域にまで昇華させることが出来たのは、この「序」が示す通り、中国文化の影響なしには考えられません。

安倍総理のみならず、最近の論調を見ていると、日本文化から中国文化の影響を切り離そうという傾向が感じ取れます。私としてはこれには賛同しかねます。だからといって中国べったりというわけではありません。日本人はこれまで中国から多くのものを学び、そのエッセンスを吸収し、保存してきました。その努力たるや大変なものです。その努力の中から、日本独自の文化が生まれたと言っても過言ではありません。

今の中国では忘れ去られたかに見える優れた文化が、日本に息づいている例は数多く見られます。日本各地の寺社に残る行事、雅楽や能楽、正倉院に残された楽器や仮面等、多くは中国から来たものですが、中国ではとっくの昔に消失しています。魯迅がかつて注目した版画などもその顕著な一例です。その忘れ去られた文化を掘り起こすために中国から日本を目指す留学生も後を絶ちません。中には江戸時代の儒学や漢詩を研究するためにやって来る人たちもいます。いわば中国文化の里帰りです。こういう留学生には無条件に拍手を送りたいと私は思っています。

政治や経済の上ではこれからもいろいろ軋轢があるかもしれませんが、両国民が互いの文化を認め合い、学び合うことを忘れなければ、日中間の未来はさほど暗いものにはならないはずでふ。「令和」がその絆を示す合言葉となって定着することを、私としては願ってやみません。